

Exhibitions in Kagoshima

令和7年度

鹿児島大学附属図書館

鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

合同貴重書公開

博覧会 鹿
覧の 児
会 島

鹿児島大学附属図書館

は し が き

鹿児島大学附属図書館では、地域で大切に引き継がれてきた歴史的資料の保存と活用に取り組むとともに、多くの皆さんにその価値を知って頂くために毎年貴重書公開展を開催しています。

今回は、今年55年ぶりに大阪で開催された『博覧会』を取り上げます。1867年のパリ万博では薩摩藩が幕府と並んで参加し、好評を博したことはよく知られていますが、19世紀後半は「博覧会の時代」と呼ばれ、博覧会は各国が最新技術や芸術を競い合う場でありました。また、明治に入って産業振興を目的に国策として国内博覧会が開かれるようになり、ここ鹿児島でも盛んに開催されています。文明開化の時代から戦後の復興期、そして経済発展を謳歌し科学技術への期待に満ちた時代へと、博覧会はそれぞれの時代の気分を映し出してきました。当時の資料に残るそれぞれの時代背景、その中には懐かしく感じられるものもあるのではないのでしょうか。

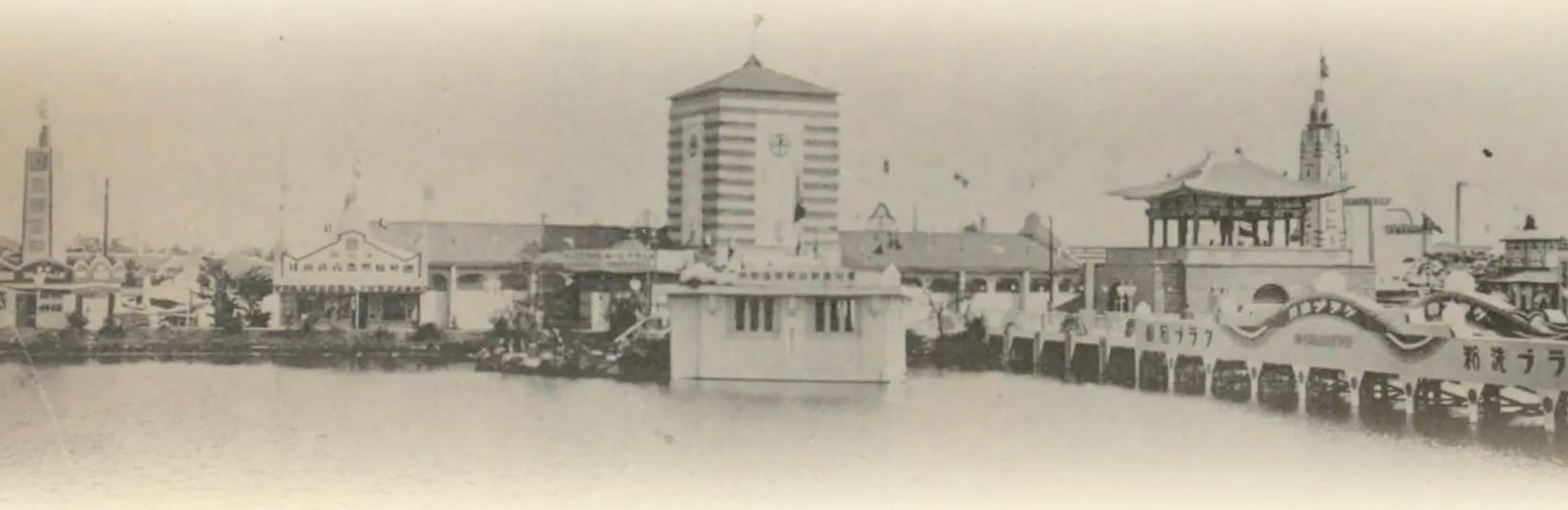
昨年の貴重書展では『源氏物語』の世界に焦点をあてましたが、今回は近代の『博覧会』と、一挙に千年近い時を飛び越えました。歴史的資料は、このような時空の旅の醍醐味を私たちに与えてくれます。このことに感謝すると共に、様々な資料を残し、引き継いでくださった多くの方々に心より敬意を表します。また、最後になりましたが、今回の企画展開催にあたりご協力を賜りました皆様に深く御礼申し上げます。

令和7年11月

鹿児島大学附属図書館長 山本智子

目 次

開催趣旨	1	V 鴨池公園	18
I 薩摩藩と博覧会	2	「鹿児島の博覧会」関連年表	20
II 内国博覧会と共進会	5	参考文献	21
III 鹿児島の博覧会－戦前－	10	鹿児島の博覧会の主要会場	21
IV 鹿児島の博覧会－戦後－	14		



昭和6年（1931）開催の国産振興博覧会のパノラマ写真（p10の会場見取図参照）

開催趣旨

今年度の貴重書公開展は、鹿児島大学附属図書館と鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターとの合同企画展として開催します。

今年は55年ぶりに大阪の地で、大阪・関西万博が開催され、さまざまな話題が提供されました。また、鹿児島では、明治16年（1883）に建設された旧鹿児島県立博物館考古資料館（興業館）の建物が鹿児島ブランドショップとして改修されるという話や、昭和6年（1931）に国産振興博覧会の会場となった鹿児島市鴨池公園、その跡地に建つイオン鹿児島鴨池店（旧ダイエー鹿児島店）が建物の老朽化により取り壊され、再開発されるニュースが伝わっています。近年、かつて鹿児島の博覧会が行われた場所の利活用が注目されています。

今回は鹿児島の人が関わった博覧会、鹿児島で行われた博覧会を主な対象とし、「博覧会の時代」と言われる19世紀・20世紀の日本の殖産興業を中心とした近代化の一端を明らかにすることを目指します。近代から現代にかけ、勸業政策の一環として博覧会を重視した大久保利通をはじめ、多くの鹿児島出身者が博覧会に関与しています。また、鹿児島県内でも地方博覧会が数多く開催されてきました。これらの博覧会を時系列でたどり、開催場所やそれに関わった人物、博覧会会場のその後の土地の利用、街の変化などを可視化し、博覧会を通して日本と地域の近現代を考えたいと思います。

「鹿児島の近現代」教育研究センターでは、令和4年（2022）10月の設立以来、3年にわたってデジタル南日本新聞データベースをセンターと附属図書館に設置してきました。今年度の予算により昭和31年（1956）から平成6年（1994）までのデータベースを購入、明治15年（1882）以来の『鹿児島新聞』や『鹿児島実業新聞』、そして現在の『南日本新聞』に至るまで残存する新聞を資料として活用できるようになりました。これらは学内の教職員のみならず一般の方々の利用も可能です。今回の貴重書展はこのデータベースを大いに利用することを心掛けましたが、それは鹿児島の近現代の歴史や文化などの研究に役立てていただくことを願っているからです。

鹿児島における博覧会の関係資料にはまだ埋もれたままの重要なものもあると思われます。そうした資料の掘り起こしにもご協力いただければ幸いです。

末筆ながら、本展の開催に当り、多くの団体、個人にご協力を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

鹿児島大学法文学部附属 「鹿児島の近現代」教育研究センター長
丹羽 謙治



『国産振興博覧会誌』（国立国会図書館デジタルコレクションより）

I 薩摩藩と博覧会



博覧会の時代

19世紀、ヨーロッパ各国は自国で博覧会を開催する「博覧会の時代」が到来する。そして、1851年、ヨーロッパにおける博覧会の集大成として、世界初の国際博覧会であるロンドン万国博覧会が開催された。欧米諸国が自国の工業力を顕示するためにしのぎを削り、「世界の工場」たるイギリスが、工業生産物に対する褒賞のほとんどを獲得する一方で、他国は食料品、手工品、原料に対する賞を受けた。すなわち、最初の万国博覧会（以下、万国博）は、いち早く工業化を果たして工業製品供給国としての地位を確立したイギリスと、一次産品供給国としての他の従属的な経済圏との連動的な世界経済を象徴する博覧会でもあったのである。

一見、平和にみえる万国博であるが、その実態は各国の工業力を競う経済戦争の一形態であったといえる。また、欧米で博覧会が興隆していく陰で、列強は強大な経済力、軍事力を駆使して市場開拓を行い、植民地を獲得していったのである。すなわち、博覧会は平和な世における戦争、軍事力ならぬ工業力を競う戦争であった。

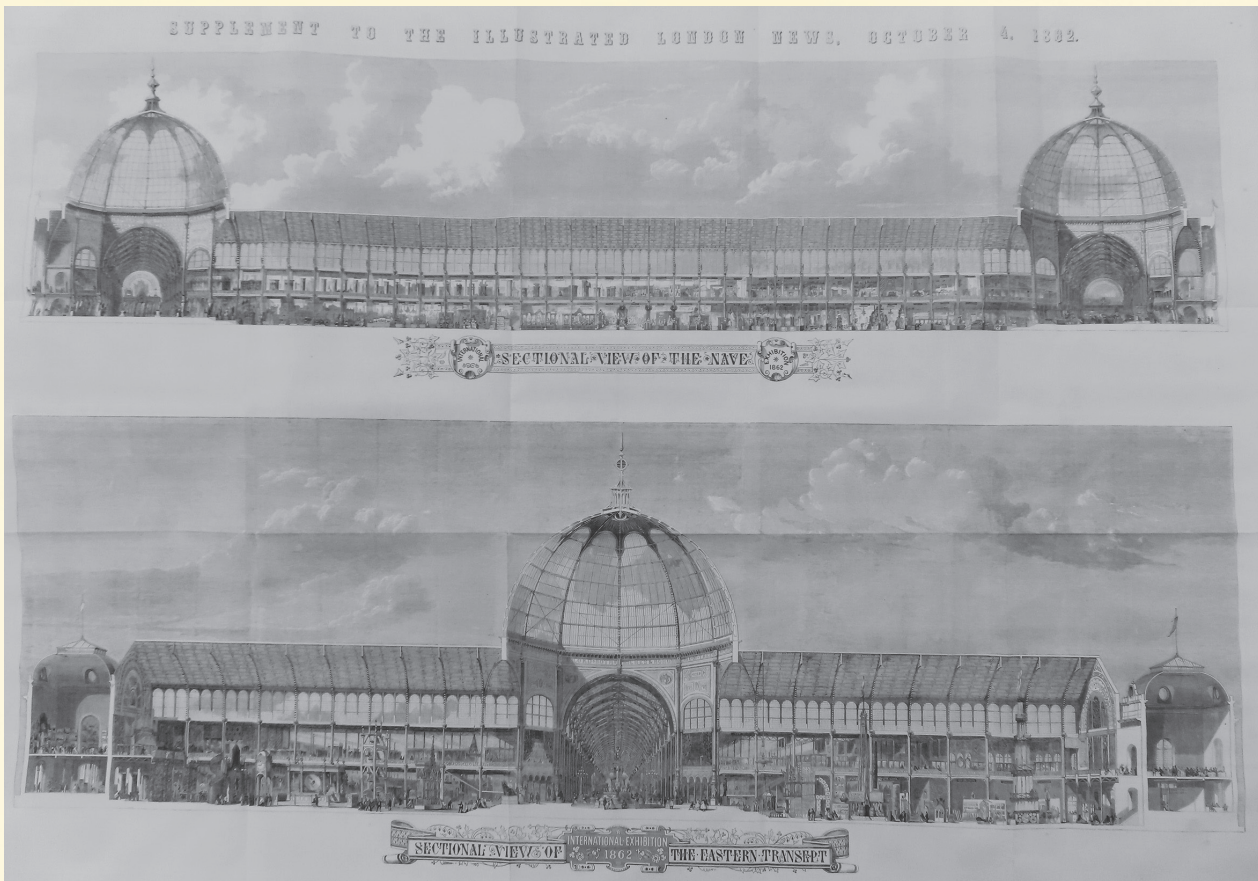


図1. 第2回ロンドン万国博のパビリオン『イラストレイテッド・ロンドンニュース』1862年10月4日付
（「鹿児島近現代」教育研究センター蔵） ※福沢諭吉を含む幕府使節団がこの万国博の開会式に参列した。

第2回パリ万国博覧会（1867年）

1867年のパリ万国博は、日本が主体的に参加した初めての万国博であった。日本にとって、自らの存在を諸外国に発信するだけでなく、ヨーロッパの最先端の産業・技術および文化を知る機会となった。一方で、それまでほとんどの人びとにとって未知の国であった「日本」が、この万国博を通じて、フランス社会によって発見される「契機」となったのである。

日本への参加要請は、フランス外務大臣エドゥアール・ドルアン・ド・リュイスから駐日公使レ

オン・ロッシュを通じて幕府に伝えられた（1865年3月7日付文書）。ロッシュの働きかけによって、幕府は正式にパリ万国博への参加の旨を伝えることになる（同年8月22日〈慶応元年7月2日〉付書簡）。なぜ幕府は参加を決断したのだろうか。このころ幕府は第二次長州征討の最中であった。一方、薩摩藩は、元治2年（1865）にイギリスへ使節団を送るなど、独自の外交関係を構築していた。国内において幕府の威信がほころびを見せるなか、ロッシュの説得に応じることで、幕府はパリ万国博への参加をフランスといっそう良好な関係を築く機会ととらえ、国内外で幕府の権威を高めることを意図したのである。将軍徳川慶喜は、次期将軍の有力候補である満13歳の弟昭武^{あきたけ}を名代として参列させ、「日本」の主権が幕府にあることを諸外国に示す外交上の切り札とした。

「物」を介した日本イメージの形成

フランス帝国委員会の出品分類や求めに応じるかたちで、当初は、幕府は単独で、江戸商人とともに出品物の収集を行っていたが、諸藩から対外交渉の独占に対する批判や出品希望などの要請を受けたこともあり、諸藩にも出品を呼びかけることとなった。ただし、幕府は「日本国旗のもとで」、幕府の統括による諸藩の出品物の展示を行うことを重視した。ところが、フランス帝国委員会が作成した『総カタログ』（初版）には「日本帝国（Empire du Japan）」と「琉球公国（Principaute de Liou-Kiou）」がそれぞれ独立した参加国として記載され、その「琉球公国」の出品者が薩摩藩主の「松平修理大夫源茂久殿下」と表記されたのである。薩摩藩は幕府の命を無視して独自の行動をとっていたのである。『総カタログ』（第2版）において、「琉球公国」は削除されたが、「日本」の項目には「大君政府」「薩摩太守政府」「肥前太守政府」とそれぞれが「政府（gouvernement）」として併記された。また、「仏国領事宛薩摩藩出品の覚書」によると、薩摩藩は塗器、陶器、鋳石、材木、農具、茶器、竹細工、織物、小間物類、茶等や、琉球産として砂糖、織物、塗器、泡盛酒、籐細工などを出品しており、『国際審査委員会報告書』の「絹織物」部門やグランプリで評価された「漆器」では日本のなかで「薩摩」の出品物のみが取りあげられ、絶賛されたのである。

この万国博に参加することで自らの統率力と日本の一体性を演出しようとする幕府の思惑とは裏腹に、薩摩藩の策謀により国際的な舞台でその政治的ゆらぎ—寺本敬子のいう「絶対的な帝政国家ではなく、封建領主の連邦国家であった」ということ—を露呈する結果となったのである。

ウィーン万国博覧会（1873年）

ウィーン万国博覧会は、明治政府が初めて公式参加を果たした万国博であった。明治4年（1871）2月5日、オーストリア＝ハンガリー帝国外交官ハインリッヒ・フォン・カリチェから参加を打診されるものの、明治政府は政体不安定を理由に辞退している。12月3日、日墺修好通商条約^{にちおう}の締結にあたって、再びオーストリア公使ヘンリー・ガリッチからの打診を受けて参加へと転換し、同月23日より出品物の概略に関する協議がはじまった。

明治5年（1872）正月14日、太政官布告によって、全国にウィーン万国博への参加と展示品収集が呼びかけられた。そして、博覧会副総裁に任命された佐野常民^{さのつねたみ}が提唱した万国博覧会参加の目的には、日本国土の豊かさと優れた伝統技術を海外に紹介し、出品した産物や工芸品などの輸出増加をめざすこと、これに対して西洋の近代文化を学び、機械技術を伝承するための技術を養成することのほかに、博物館を創設し博覧会を開催するといった大きな目標が掲げられた。明治5年（1872）



図2. 薩摩琉球国勲章
(尚古集成館蔵)

3月10日、湯島聖堂大成殿を会場として文部省博物局による最初の博覧会が開かれた。この博覧会の陳列品は、翌年開催されるウィーン万国博の参加準備も兼ね、広く全国に出品を呼びかけ収集している。「博覧会出品目録草稿」によると陳列品は、御物をはじめとする古器旧物（文化財）と剥製、標本などの天産物を中心に600件余りを数え、広汎な種類の展示であったことが知られる。また、明治政府は博覧会閉幕直後の5月から10月にかけて、ウィーン万国博への出品選定も兼ねて全国的な文化財調査を行った（壬申調査）。

こうして明治政府によって収集された出品物は万国博会場に到着すると、オーストリア公使館員ハインリヒ・フォン・シーボルトとドイツ人お雇い外国人ゴットフリート・ワグネルの指導の下に展示された。入口を抜けると、名古屋城の金鯢が据えられ、日本的で精巧な美術工芸品（織物・竹細工・磁器・漆器・銅器）の展示コーナーがあり、高さ約4mの東京谷中天王寺五重塔模型、直径2mの大太鼓、鎌倉大仏模型が置かれた。優良工芸品により日本の伝統や悠久の歴史をアピールし、日本的イメージを演出するとともに、巨大物によるインパクトを通じて「日本」を記憶させようとしたのである。

第3回パリ万国博覧会（1878年）

19世紀後半、万国博覧会を通して、日本の工芸品はまさに「日本文化」を視覚的に表象する代表的な存在となった。明治11年（1878）のパリ万国博は、多くのフランス人にとって、実際に日本を訪れ、直接その文化に触れるということが稀であった時代に、「日本文化」は主として工芸品という目で見えて手で

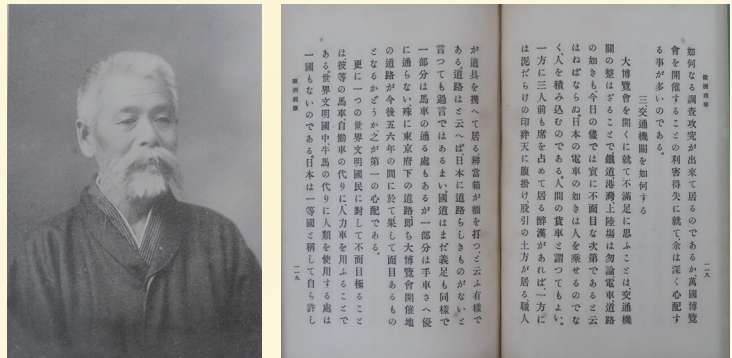


図3. 前田正名『欧州視察』（「鹿児島近代」教育研究センター蔵）

触れることのできる「物」を介して理解され、評価され、そして受容されていったのである。この万国博の日本参加にさいして、事務官長として実質的に日本の出品実務を主導したのが薩摩藩出身の前田正名^{まへだまさな}であった。前田は明治9年（1876）3月にフランスから帰国すると、同年10月から各地で起こった大規模な士族の反乱や明治10年（1877）2月に西南戦争が勃発し、万国博への参加辞退が危ぶまれるなか、大久保利通内務卿、大隈重信大蔵卿、松方正義大蔵大輔兼勸業寮長に万国博参加の意義を説いた。そして、工芸品の出展を通じて、日本の伝統的な図柄等を用いながら、欧米の実用に適した工芸品を製作、展示、販売し、それを契機に輸出振興を図ることを出品の目的に掲げたのである。前田の輸出振興策は、その思惑通り、日本出品物の売り上げは大きく、商業的に成功を収めた。フランスの統計によると、日本磁器の輸入額は、明治11年（1878）から明治22年（1889）のおよそ10年間で約2.4倍に増加している。日本の統計においても、年間のフランスに対する日本陶磁器の輸出額は、明治13年（1880）から明治22年（1889）のおよそ10年間で約2.7倍に増加している。一方で、フランスの批評家たちは、ヨーロッパ趣味に適するように行われた日本工芸品の図柄などの変更、そしてこれによる日本固有の独創性の喪失を批判した。ここに、日本の出品者が呈示しようとした「日本」像と、西洋の価値観に適合し商業主義化した「日本」ではなく、開催国フランスが求めた西洋的な要素とは異質なものとして保たれた伝統的な「日本」像が一致していなかったことが知られる。こうした異なる動きを通じて、フランスにおいて「日本文化」が積極的に受容され、「ジャポニスム」が成立していったのである。（佐藤）

II 内国博覧会と共進会



博覧会のはじまり

明治4年（1871）10月、天皇が東京に移遷後、京都の町の活性化のため、京都西本願寺の大書院で甲冑、古書画、陶磁器などを展示した。これが我が国「博覧会」の嚆矢とされる。また、幕府が産業振興物産会開催のため開成所内に蓄えていた物産を引き継いで明治4年5月、物産会が東京招魂社（現在の靖国神社）に隣接する薬園で開催された。これを指揮したのは旧薩摩藩士で英国留学生を引率したことでも知られる町田久成であった。同年には博覧会事務局が開設され、その指示のもとで各地の産物調査が始められる。現在の宮崎県下を巡回調査したのは江夏干城、木脇啓四郎、江口暁帆らの旧薩摩藩士で、その記録が『日隅薩巡回採摘品彙覧図』（東京国立博物館蔵）である。明治5年（1872）には博覧会が湯島聖堂大成殿で開催された（前述）。

内国勸業博覧会

岩倉遣欧使節団に加わり、つぶさに産業革命後の西洋を目の当たりにした大久保利通は、帰国後、性急な近代化政策を否定しつつ、産業を育成して漸進的に近代化を推し進める方針を打ち出す。そのため内務省を設立し、内国勸業博覧会を開催した。内国勸業博覧会は合計5回開催された。第1回から第3回（1877年、1881年、1890年）は東京上野公園で、第4回（1895年）は京都岡崎公園、第5回（1903年）は大阪今宮でそれぞれ開催されたが、日本での万国博覧会開催を見据えながらの開催であった。

第1回は明治10年（1877）8月21日から11月30日まで東京上野で開催された（右図は内務卿大久保利通が出した規則の制定を告げる布達）。同年2月に勃発した西南戦争によって、延期する意見も出されたが新政府の面子をかけて開催された。会期中の入場者は45万余にも達した。

明治14年（1881）4月、内務省の勸農局・駅通局・博物局・山林局、大蔵省の商務局等の職掌が新設の農商務省に移管された。博覧会関係は以後同省の担当となる。

鹿児島県では、西南戦争後の復興と統治を任された渡辺千秋県令のもと、明治14年3月1日からの第2回内国勸業博覧会より出品を行っている。『第二回内国勸業博覧会褒賞授与人名表』によると、賞牌（褒賞メダル）を受けたのは、

近世以来の鹿児島の特産物によるものが多い。

やまがの せりがの
山ヶ野・芹ヶ野金山の製金（烏津忠義、有功賞牌三等）、鹿籠金山の製金（渋谷国安ら、同上）、白糖（桐野孫太郎、同上）、葉煙草・刻煙草（河野勘太夫ら、同上）、綿糸（濱崎太平次、同一等）、その他褒状受賞者の中には沈壽官（苗代川）、小杉恒右衛門（加治木）らの名が見える。また亀城女学校（申木野麓にあった女子小学校）と加世田小学校が生徒裁縫品で褒状を受賞しているのが注目される。小学生の作品が出品されていたのである。

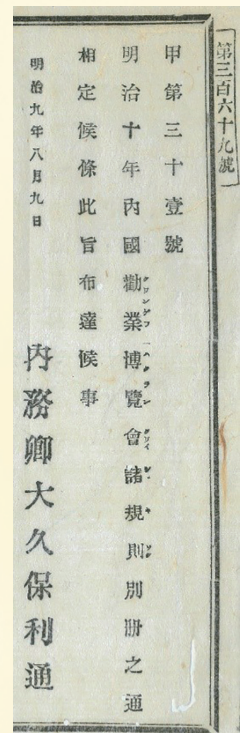


図4. 明治九年甲三十壹号布達（個人蔵）



図5. 『薩隅煙草録』（鹿児島大学附属図書館蔵）

また、鹿児島県の勸業課の青江秀^{あおえ けいすけ}が『(薩隅) 煙草録』で有功賞状二等を、同じく白野夏雲^{しらのかうん げい}が『名石類集』で、大阪の五代友厚^{ごだいともあつ}が福島の半田銀山の銀鉦と鉦石型銅で同三等を受賞している。なお、第2回までは官民ともに賞が授けられたが、第3回以降は民間に限られた。

共進会

共進会とは、殖産興業と技術向上および交流を目的として穀物や茶、煙草などの農漁業製品、工芸、工業製品を一堂に集め、一般に展示しながら専門家による品評・審査を行う会で、国の支援のもと府県が開催するものから村や民間が主導するものまで多種多様であった。

御雇い外国人ゴットフリード・ワグネルが「地方小博覧会」開催を提言、また大久保利通も内国博覧会を5年に一度、全国をブロックで分け県が持ち回りで開催する地方博覧会を計画した。大久保の死後（明治11年（1878）暗殺）、事業を引き継いだ松方正義^{まつかた まさよし}（内務省勸農局長）は、明治12年（1879）に製茶共進会と生糸繭共進会を横浜で開催した。茶と生糸はいずれも当時の日本の重要な輸出品であった。

明治17年（1884）から20年（1887）の4年間には719の共進会が開かれ、人員39万余人、出品物類73万余点、縦覧者は419万余を数えたという（『国史大辞典』「共進会」の項）。展示された製品は、希望者に売却され、経費の回収がなされた。また、優秀な製品を提出した者には、内国博覧会（内国博覧会は万国博覧会に準拠）に準じて褒賞が授与され、受賞者は新聞で報道された。会の記録として報告書や記念誌が、また一部の会では絵葉書も作成された。

鹿児島県管内開催の初期共進会としては、明治14年（1881）10月5日より5日間開催された産馬競進会、同18年（1885）繭生糸品評会など各種品評会がある（『鹿児島県史』第四巻）。

府や県が連合して開催する大規模な共進会も増えていく。関西では大阪府が中心となり、近畿・中国・四国・北陸の県が参加する関西府県連合共進会が開催され、明治16年（1883）の大阪を皮切りに2～5年おきに開催され、数を重ねたが、第10回は明治43年（1910）3月16日から6月13日まで名古屋の鶴舞公園にて東京を初め関東・中部を含めた3府28県におよぶ大規模な形で開催されている。九州では、同年3月11日から5月9日まで、福岡で、第13回九州沖繩八県連合共進会が開催され、福岡城の佐賀堀を埋め立てた会場には90万人を超える来場者を集め、市の発展に貢献した。一方、東北6県は明治中期から奥羽六県連合共進会を開催し、山形では大火からの町の復興のために開催されたこともある。

内国水産博覧会

明治15年（1882）5月、農商務卿河野敏謙^{こうの とがま}は、翌16年3月1日から100日間、水産博覧会を開くことを布達した。鹿児島県勸業課長の白野夏雲^{しらのかうん}や御用掛の津田省一が、その取り調べのために県内巡回を命じられ、出品に向けて準備が進められていった。鹿児島近海の魚介類の図譜が『魔海魚譜』^{げいかいぎよふ}であり、これは木脇啓四郎^{きのわき けいしろう}と二木直喜^{ふたき なおき}が原図（彩色）を描き、それをもとに銅版の書籍として県の勸業課が刊行したものである。この刊本を含め、県勸業課の出品6点に対して三等賞状が、白野に対して三等賞が贈られた（『水産博覧会褒賞授与人名録』）。なお、『魔海魚譜』原図はその後、興業館に額入りで掲げられた（木脇啓四郎『萬留』）。



図6. 「つがに 背」『魔海魚譜』
(鹿児島県立図書館蔵)

内国絵画共進会

内国勸業博覧会においても絵画を中心とする美術品は出品の対象となっている。農商務省は、美術の発展のために絵画共進会を計画する。ただし、絵画のうちでも西洋画を除く日本画と漢画が対象であった。急激な欧化主義に背を向けて伝統的国粹的な文化を保護しようとする龍池会の方針と一致していたという。龍池会の会頭を務めていたのが、ウィーン万博の副総裁であり、内国絵画共進会の審査長の佐野常民であった。

木脇啓四郎(画号「三山」)は明治15年(1882)の第1回絵画共進会に、第五区(円山派)に武者絵を出品したが、翌16年11月8日、白野夏雲は木脇に書簡を送り、17年4月に開催される第2回の絵画共進会への出品を促している。県の官吏が、勸業政策で大きな役割を演じていることが窺える。

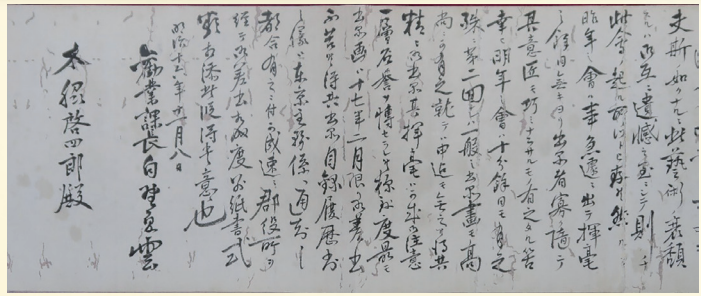


図7. 白野夏雲が木脇啓四郎に絵画出品を促した書簡(部分)
(鹿児島大学附属図書館木脇家文書)

九州沖縄八県連合共進会

九州沖縄八県連合共進会の概要

回	開催県	期間(年・月・日~月・日)(日数)	品目(審査区分)	縦覧人数(人)
第1回	長崎	明治15・10・1~10・30(30日)	生糸、繭、茶、櫛蠟、砂糖	6,856
第2回	鹿児島	明治16・10・20~11・28(40日)	煙草、繭、生糸、砂糖、麻苧、織物	4,249
第3回	熊本	明治17・11・1~11・30(30日)	綿、麻苧、砂糖、紙、生糸、織物	38,023
第4回	佐賀	明治18・10・1~11・9(40日)	綿、茶、砂糖、繭、織物、鰯	?
第5回	福岡	明治20・2・10~3・31(50日)	米、櫛蠟、茶、繭、生糸、織物	147,769
第6回	大分	明治21・2・20~3・30(40日)	繭、生糸、茶、砂糖、鰯、織物	71,382
第7回	宮崎	明治22・2・20~3・31(40日)	小麦、葉煙草、櫛蠟、茶、繭、生糸、織物	63,582
第8回	沖縄	明治27・2・10~3・21(40日)	鰯、茶、麻、砂糖、繭、生糸、織物	81,392
第9回	長崎	明治30・2・10~3・21(40日)	小麦、繭、生糸、茶、砂糖、製造煙草、織物、花苳、陶磁器、水産物(鰯・乾鮑・鱧鱈・海參)	152,766
第10回	鹿児島	明治32・2・10~3・21(40日)	米、大豆、繭、生糸、紅茶、緑茶、砂糖、木蠟、製造煙草、絹織物、綿織物及雑織物、花苳、紙、椎茸、陶磁器、鰯、乾鮑、鱧鱈、鯉節	163,968
第11回	熊本	明治34・2・10~3・31(50日)	米、麦、繭、生糸、紅茶、緑茶、砂糖、木蠟、製造煙草、絹織物、綿織物小及雑織物、麻、紙、椎茸、陶磁器、酒類、鰯、鱧鱈、鯉節	276,587
第12回	佐賀	明治39・3・11~4・29(50日)	米、麦、大豆、繭、生糸、紅茶、緑茶、砂糖、木蠟、絹織物、綿織物及雑織物、麻、紙、椎茸、木炭、陶磁器、酒類、醬油、柑橘、素麺、莞苳、鰯、鱧鱈、鯉節、海參、干鮑、農具	434,124
第13回	福岡	明治43・3・11~5・9(60日)	米、麦、大豆、小豆、落花生、麻、菜種、蘭草、櫛実、葉蘭、果物(柑橘・梨・干柿)、飲食品(紅茶・緑茶・砂糖・酒類・清涼飲料・醬油・製粉・素麺など)、蚕業生産品、工芸品(木蠟・紙・莞苳・漆器・金属品など)、染織物、陶磁器、水産物、漁撈具、林産物、鉱産物、畜産(牛・豚・鶏)、肥料(干鰯・骨粉・油粕類)、特許品	910,000余
第14回	大分	大正10・3・15~5・13(60日)	米、麦、大豆、小豆、落花生、馬鈴薯、甘藷、麻、蘭草、櫛実、菜種、葉蘭、葉煙草、肥料、蔬菜、果物、種苗、農業・園芸機具、蚕業生産品、林業生産品および狩猟、水産業、鉱業・土石、飲食品(紅茶・緑茶・砂糖・酒類・清涼飲料・醬油・味噌・製粉・素麺・菓子など)、染織物、製作工業(金属製品・漆器・紙製品・文房具・装身具・計測器・家具・人形など)、化学製品(陶磁器・硝子・紙・皮革・薬品など)、意匠図案、特許品、畜産(牛・豚・鶏)、肥料(干鰯・骨粉・油粕類)、	980,910 (第一会場と第二会場の累計)

品目および縦覧人数の根拠資料は次のとおり。「明治十五年農商務卿第二回報告」「明治十六年農商務卿報告(第三回)」「明治十七年農商務卿第四回報告」「農商務省第七回報告 明治二十年」「第六回九州沖縄八縣聯合共進會報告」「九州沖縄八縣聯合共進會報告」「府県聯合共進會審査復命書」「鹿児島新聞」(M32・2・14(二))「第十一回九州沖縄八縣聯合共進會報告」「第十二回九州沖縄八縣聯合共進會報告」「福岡市史」「第十四回九州沖縄八縣聯合共進會事務報告」

前頁の表に示すように明治15年（1882）、長崎で第1回の九州沖縄八県連合共進会（初回は佐賀県が長崎県に、宮崎県が鹿児島県にそれぞれ編入されていたので6県）が開催されたが、第2回が鹿児島市（これ以降8県の合同開催となる）である。次いで熊本・佐賀・福岡・大分・宮崎・沖縄の順でほぼ毎年行われた。二巡目は間隔が空き、14回の大分市の開催で終了している。明治中期、まだ鉄道も普及していない当時、船や馬車による移動が中心であり、遠く離れた会場まで産品を運搬、展示するのは困難が伴ったものと思われる。

また、表からは、二巡目以降区分（品目）が増加し、従来の第一次産業の産品に、第二次・第三次産業の品が加わっていることがわかる。国内産業の規模拡大と構造の変化が看取される。

明治期の各県都は現在と比べると、市域が狭く、人口も少ない。共進会の会場は市の中心部、県庁の周辺で開催されるケースがほとんどである。第2回の鹿児島の場合も、県庁に程近い興業館（大谷光尊の寄附金により建設）が会場となった。縦覧者は4249人である（「農商務卿報告第三回」）。この共進会が刺激となって栃木県の専門家の派遣などが行われ、伊佐郡の麻の生産が伸長したことが指摘されている（『鹿児島県史』第四巻）。

第10回九州沖縄八県連合共進会は明治32年（1899）2月10日に鹿児島県庁で開会式が執行された。会場は、裁判所に隣接する県庁と物産陳列場（旧興業館、後の鹿児島県立博物館考古資料館）にまたがる敷地で、西本願寺裏に表門が設置され、左手に事務所、その奥に第一陳列館（板葺の平屋で土間）、さらに第二陳列館（同前）と続き、その奥に中庭を囲む形で、審査館、第三・第四陳列館、参考館（旧興業館）が配された。南泉院通（現在の照国通）に面して裏門が設けられており、そこを出た下南泉院通に来場者向けの売店や飲食店が軒を連ねた。

縦覧人は16万3968人を数えたが、一日平均では4099人の来場となる。出品物は2月15日より予約を受け付け、予約金を徴収、各県に運んだ後残金と品物を交換する形で売却が行われた。（丹羽）



図8. 第10回九州沖縄八県連合共進会の会場となった場所（跡地）を写した絵葉書。左の破風のある二階建の建物が裁判所。城山との間に旧興業館が見える。

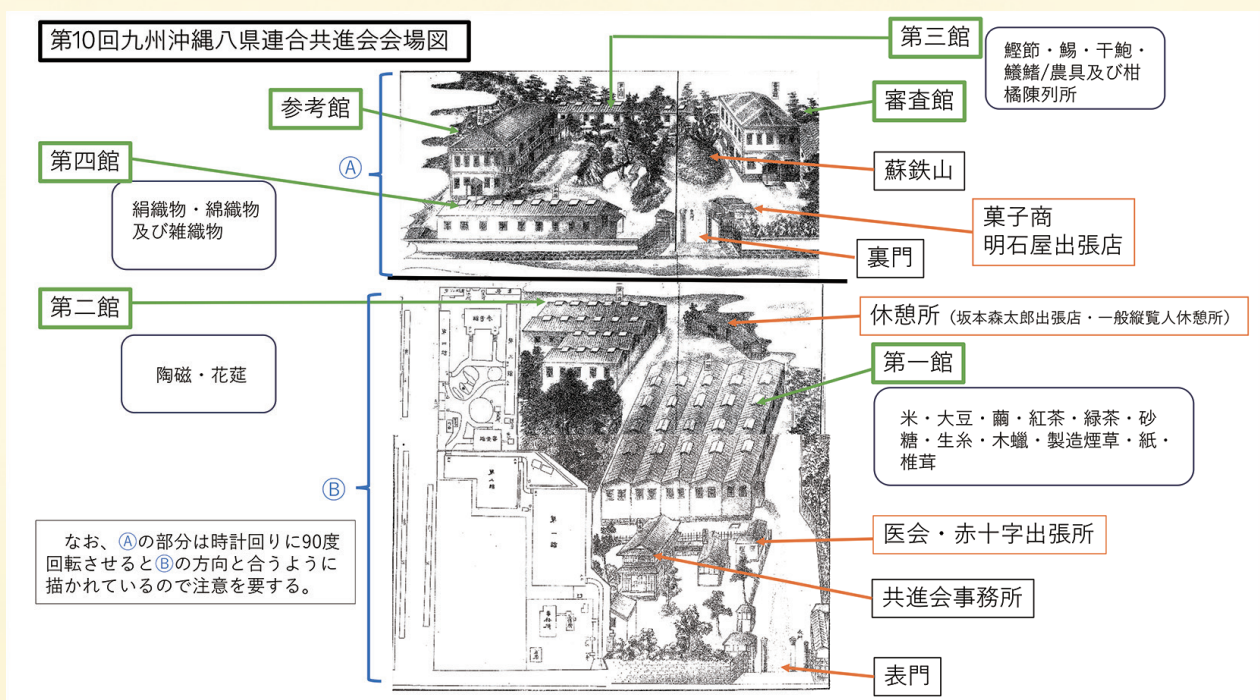


図9. 森新太郎編『鹿児島土産 附共進会案内』（明治32年刊、国会図書館蔵）による。

コラム

館馬場の洋館－興業館と医学校－

鹿児島市の観光スポットである西郷銅像や鶴丸城御楼門などが建つ通りは「歴史と文化の道」と呼ばれ、市民と観光客が行き交う道である。この道は、近世には鹿児島城本丸・二之丸前を通ることから「館馬場」と称され、明治期には洋風建築を含む官衙（県庁・市役所・裁判所）や学校が建ち並ぶ鹿児島の近代化を象徴する街路でもあった。石畳の歩道を照らすガス灯を模した街灯はこれに因む。

館馬場の南端に位置する特徴的な外観の建物が旧鹿児島県立博物館考古資料館で、鹿児島市街地では旧集成館機械工場に次いで2番目に古い石造建造物でもある。明治16年（1883）に建設された当初の名前は「興業館」と言い、西南戦争から復興する鹿児島の商工業の改良発達を目的に開催された第2回九州沖縄八県連合共進会のパビリオンとして県が設置した。その建設費用は浄土真宗本願寺派（西本願寺）門主の大谷光尊の寄付による。同館は、明治32年（1899）の第10回連合共進会でも会場となり、その後も特産品陳列など鹿児島県の産業振興の施設として利用された。

当時、鹿児島城旧本丸を挟んだ反対側で、館馬場の北端（私学校跡、現鹿児島医療センター付近、鹿児島市城山町）にも洋館が建っていた。鹿児島県が陸軍省所轄地を借用して明治15年（1882）に開設した県立医学校并附属病院である。地方における医師養成を目的として、明治13年（1880）に加治屋町二本松馬場で開校した医学校と病院が仮校舎であったことから、浄土真宗大谷派（東本願寺）法主の大谷光勝が洋風建築の校舎と附属病院を新築して県に寄付したものである。

公立医学校運営費の地方税支弁禁止により明治21年（1888）で閉鎖されたため、開校期間の短さから存在は全く知られていないが、その建物は当時の商工案内に確かに描かれている（図10）。なお、病院南隣の城山麓に描かれている「中学校」（当時、鹿児島高等中学造士館）も洋風で、明治15年（1882）に磯（現鹿児島市吉野町）から移築された「西洋館」（昭和11年（1936）に「明治天皇臨幸記念館」として磯へ再移築）である。

二つの本願寺勢力による城跡の南端と北端の洋館の存在は、当時の鹿児島での両者による布教活動と変貌する城跡の景観を考えるうえで好材料と言える。（小林）

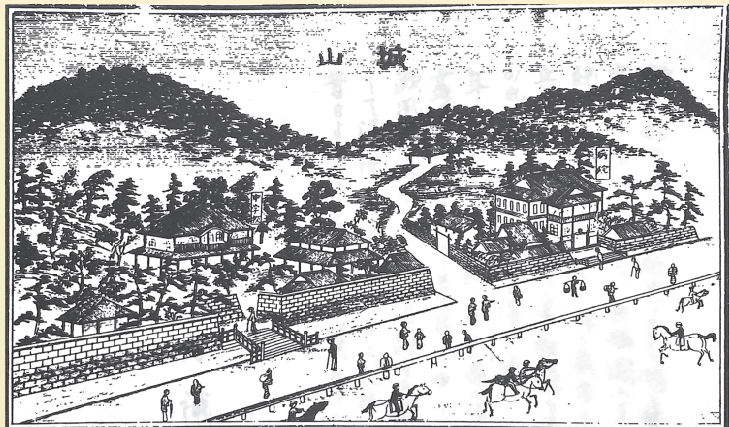


図10. 館馬場の病院 『鹿児島独案内 一名・名勝商工便覧』（竜泉堂、明治22年刊行）〈『絵で見る明治商工便覧』第10巻（ゆまに書房、1987年）〉より。※左に「中学校」、右に「病院」、右下に練兵場での乗馬の様子を描く。

「人間の展示」を發明し帝国主義を正当化したが、朝鮮館の少女の「展示」と文物の紹介はまさに、近代日本の帝国主義を映し出す鏡であった。入場料は、第1会場から第3会場まで通して大人30銭、子ども15銭と設定された。軍人と中等学生、団体は割引が適用された。

博覧会は好評を博した。例えば4月12日は、「在郷軍人一万余名を筆頭に各地方からの団体が次から次へと会場へ会場へと押し寄せる有様」を呈し（『鹿兒島新聞』4月13日付朝刊5面）、4月26日は入場者数が3万人を数え「人の群人の山の賑ひでごつた返し」であったという（『鹿兒島新聞』4月27日付朝刊7面）。

博覧会の開催は県内外から多くの人を鹿兒島に呼び込んだ。『鹿兒島新聞』5月6日付朝刊7面に掲載された記事によれば、4月の鹿兒島駅と西鹿兒島駅（現鹿兒島中央駅）の乗降客数は著しく増加したという。具体的には、鹿兒島駅の降車人数は11万9981人で乗車人数は11万4100人、西鹿兒島駅の降車人数は13万9595人で乗車人数は11万6422人で、平月の乗降客が各々4万人平均であったものが3倍程度になったと報じている。

市電も大盛況であった。『鹿兒島新聞』5月16日付朝刊7面の記事によれば、4月1日から5月15日までの輸送人員は271万1000人、収入は15万5556円84銭（1日平均3457円）であった。これに対し前年の同期間における輸送人員は91万3172人、収入は10万2846円31銭であり、いずれも増加したことが分かる。記事の文言を借りれば、「つまり博覧会に依る増加数字」であった（『鹿兒島新聞』5月16日付朝刊7面）。

この博覧会で特筆すべきは、薩摩義士の忠魂堂や東郷館など、鹿兒島ゆかりの〈偉人〉を主題としたパビリオンが建設されたことである。東郷館では門柱に「東郷元帥／御一代記」の文言が掲げられたほか、あたかも軍艦の甲板に立つように東郷平八郎の人形が仕立てられ、「世界的のアドミラル東郷を薩摩つ児のお国自慢に人形を以て生ひ立ちから一代記にこしらえあげ地元の意気を示した」（『鹿兒島朝日新聞』4月1日付朝刊6面）。薩摩義士に関しては、三重県桑名町（現桑名市）の海蔵寺に納められていた平田鞆負ひらたゆきえの像のほか、三重・岐阜・愛知各県に分置されていた薩摩義士の位牌を迎えてパビリオン内に安置した。薩摩義士の忠魂堂にも多くの人々が訪れ、4月12日には在郷軍人1000名余が参拝したほか（『鹿兒島新聞』4月14日付朝刊7面）、4月24日には加世田農学校生徒105名をはじめ県内の小学生や一般の大人あわせて約2000名が参拝した（『鹿兒島新聞』4月25日付朝刊7面）。

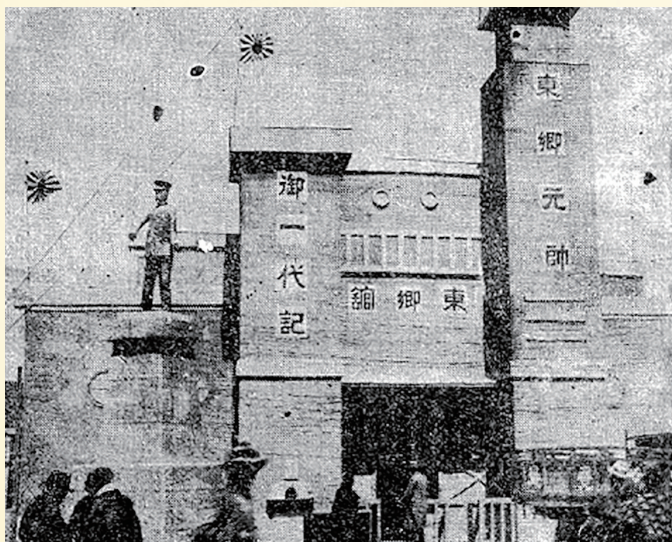


図13. 東郷館の外観（『鹿兒島新聞』昭和6年4月2日付朝刊10面掲載）

肇国興亜博覧会（1940年）

肇国興亜博覧会は、鹿兒島朝日新聞社の主催で、皇紀2600年の奉祝と同紙創刊40周年の記念事業として企画・開催された。会場は鴨池遊園地児童体育場、会期は昭和15年（1940）10月7日から同年12月1日までであった。当初、11月15日で閉幕する予定であったが、「せつかくの博覧会だ会期を延長して悠くり見せて呉れ」などの要望が新聞社に寄せられたため、会期は延長された（『鹿兒島朝日新聞』11月13日付朝刊2面）。同じ年、東京と横浜で皇紀2600年を記念した「紀元2600年記念日本万国博覧会」が企画されていたが、戦争の影響によって中止となり、幻と化したあとでの開催であった。

内容は、肇国館・聖戦館・武勳館・歴史館・厚生館・国防館・特別施設・教育館・特設館で構成された。特別施設には、諸国勇士の英霊を招魂した高さ40尺（約12メートル）の忠霊塔や、献立表と食器を佐世保海軍軍需部から提供を受けて建設された海軍兵食試食館などがあった。特設館には西郷館や義士館、映画館や本県特産品販売所が設けられた。入場料は一般が50銭、在郷軍人と中学生は25銭、小学生は15銭で、50人以上の団体は2割引であった（『鹿児島朝日新聞』10月8日付朝刊3面）。

肇国興亜博覧会にも多くの人々が足を運んだ。『鹿児島朝日新聞』10月9日付朝刊5面には「開館第一日の入場者じつに一万六千人」の見出しが躍り、翌10日の紙面は2日目の入場者が2万5000人を数えたと報じた。『肇国興亜博覧会誌』によれば、最終的な入場者は55万余人を数えたという（『肇国興亜博覧会誌』63頁）。

市電の売り上げも増加した。『鹿児島朝日新聞』10月19日付朝刊3面は、17日の乗車賃が6452円44銭であり、それまでの最高額5800円を超えて市電開通以来の最高額を記録したと報じている。最終的な総収入額は23万4024円で、これは前年同期の収入額16万8740円を大きく引き離れた結果であった（『鹿児島朝日新聞』12月3日付夕刊2面）。

会期延長が決まったあとの11月18日からは記念絵葉書も制作・発売された。内容は、会場の全景から各館の内容や野外施設を色刷りにした「絢爛豪華そのものの出来栄え」で、定価は16枚1

組30銭、肇国館だけのものは8枚1組で15銭であった（『鹿児島朝日新聞』11月17日付朝刊5面）。当初は会場内の売店でのみ販売されていたが、各方面で好評を博したことで百貨店の山形屋や鹿児島駅売店など市内6ヶ所で販売されるようになった（『鹿児島朝日新聞』11月22日付朝刊3面）。

肇国興亜博覧会の最大の特徴は、昭和6年（1931）開催の国産振興博覧会のとき以上に帝国主義イデオロギーと戦時下の日本社会における軍国主義イデオロギーが全面に押し出されていた点である。例えば歴史館では、日本海海戦当時における軍艦三笠^{みかさ}上の東郷平八郎と幕僚を現したパノラマや、元寇^{げんこう}の折に奮戦した薩摩武士のジオラマが展示された（『鹿児島朝日新聞』10月11日付朝刊5面）。あるいは聖戦館では「実戦^{さながら}宛らの皇軍将兵奮戦の場面、郷土健児活躍のパノラマ、ジオラマ」（『鹿児島朝日新聞』10月25日付朝刊5面）が、国防館では「満蒙開拓移民並に満蒙開拓青少年義勇軍に関する資料」（『鹿児島朝日新聞』10月29日付朝刊5面）が展示された。さらに野外では魚雷と機雷が毎日発射されるなど、肇国興亜博覧会はまさに「聖戦四年の東亜新秩序建設新段階に於ける国民総力戦の縮図」（『鹿児島朝日新聞』10月30日付朝刊5面）と言うにふさわしい博覧会であった。

満州事変以降、国防と産業大博覧会（昭和10年（1935）3月27日～5月10日、於広島県）や大東亜建設博覧会（昭和14年（1939）4月1日～5月31日、於兵庫県）など、戦争を肯定する博覧会が全国各地で企画・開催されるようになる。博覧会がもつメディア的性格や政治性については、既に吉見俊哉の明快な分析によって明らかであるが、「皇紀2600年」にあわせて開催された肇国興亜博覧会もまた、戦時下の日本社会にあって総力戦体制を構築するための有力なプロパガンダであった。

（伴野）



図14. 戦死した兵士の遺品をみる武勳館の来場者

（『鹿児島朝日新聞』昭和15年10月26日付朝刊5面掲載）

コラム

探偵小説と博覧会—過去と未来を繋ぐ記憶装置—

探偵小説の成熟期とパリ万博報道

江戸川乱歩が「日本探偵小説第二の山」と呼んだ1935～37年、日本探偵小説は成熟期を迎え、様々な作家が台頭し関連雑誌が簇生した。この時代、パリ万博の開催が、探偵小説界の支柱となった雑誌『新青年』（16(2)、1935年2月）誌上で伝えられている。

「巴里万国博覧会」といふと、今の若いものには、親父お祖父さんの時代の、エツフェル塔の上をマン丸い軽気球の飛んでゐる絵草紙を思ひ出させさうな古めかしくもまた物寂びて華かな「文明開化」の匂ひがするだらうが、この博覧会が復興されることになった。時は一九三七年、処はむろんパリ。（「三階席」p290）

小栗虫太郎「絶景万国博覧会」

そして、この時代に「第二の山」を支えた代表的な作家の一人・小栗虫太郎は博覧会をモチーフとした作品「絶景万国博覧会」（『ぶろふいる』1935年1月号）を生み出している。老いた元太夫のお筆が毎年雛祭に飾る筈に纏わる記憶が語られる。その筈は、かつて同じ遊女であった小式部を、矢車に括り付けて回す折檻「釘抜」により死に至らしめるためのトリックとして用いられていた。1907年（作中では1908年）、上野で東京勸業博覧会が開催され、お筆は「当時日本では最初の大観覧車」（現在では日本初でないことが判明している）を狂わんばかりに凝視し続ける。お筆は「釘抜」の記憶を観覧車に重ねていたのだ（図15）。



図15. 小栗虫太郎「絶景万国博覧会」（『ぶろふいる』1935年1月号）〈ゆまに書房、復刻版〉

夢野久作「人間腸詰」

一方、1935年に奇書「ドグラ・マグラ」を刊行した夢野久作による「人間腸詰」（『新青年』1936年3月号）では、江戸っ子の大工・治吉が30年ほど前に、1904年のセントルイス万国博覧会で台湾館に務めていた頃の怖ろしい異文化体験を語る。それは、博覧会で使われる大きな特別詠えの肉挽機械を用いて人間の腸詰を作り出す、アメリカギャングが密かに経営する工場に囚われた経験であった。治吉はギャングの親玉に逆らい「篋棒めえ日本人じゃねえか」と西洋への敵意を剥き出しに危機から逃れる（図16）。



図16. 夢野久作「人間腸詰」（『新青年』1936年3月号）〈本の友社、復刻版〉

過去と未来を繋ぐ万博

『新青年』のパリ万博報道、「絶景万国博覧会」における観覧車、「人間腸詰」における肉挽機械。博覧会は最新の文明の象徴であると同時に、過去の記憶や文化が再確認される空間として表現されている。それは、1970年の日本万国博覧会のシンボル太陽の塔が未来・現在・過去を象徴する3つの顔を併せ持つように、博覧会が過去から未来へという時間軸を内包した文化装置であることと重なるのではないだろうか。老女お筆も江戸っ子治吉も、回想という形で過去の万博を語るように、博覧会は人々が共有する記憶として歴史化されていくのである。（鈴木）

IV 鹿児島県の博覧会 - 戦後 -



九州ステートフェア 農業振興博覧会 (1950年)

昭和25年(1950)3月25日より開催された「九州ステートフェア」は、鹿児島県の戦後復興において重要な意味を持つ。鹿児島県、鹿児島市、鹿児島市農業協同組合協議会、南日本新聞社の4者が主催者として名を連ねた同博覧会は、鴨池遊園地の東会場と現鹿児島大学教育学部周辺の水田を埋め立てた西会場で構成された(図17)。「現代のエデンの花園」とキャッチコピーのついた東会場では野外演芸会や飛行塔、ウォータシュートなどの娯楽施設が設置され、農事試験場や畜産試験場に隣接する西会場では農機具共進会や技術展示が催された。また、西会場ではNHKによるテレビの実験放送も披露された。このように、「大衆向けの娯楽」と「産業振興・技術普及」が表象された博覧会は、当初の開催期間を5日延長した5月15日に好評のうちに閉幕した。発表された40万人の来場者は当時の鹿児島県の人口が約180万人であったことから、その成功が伺える。



図17. 「九州ステート・フェアきょう開幕」

(『南日本新聞』 昭和25年3月25日付朝刊2面掲載)

メキシコ文化博覧会 (1964年)

昭和39年(1964)10月24日。東京オリンピックの閉会日に「メキシコ文化博覧会」が開会した(図18)。開催地は「九州ステートフェア」の東会場でもあった鴨池遊園地。南日本新聞文化事業団によって主催された同博覧会は、次のオリンピックの開催地であるメキシコがテーマであり、11月23

日までの約1か月開催された。メキシコの文化や風俗を伝えるメキシコ館や植生を伝える熱帯植物館のほか、アメリカ宇宙科学館、ユネスコ館、結婚館など10のパビリオンが設置された。また、アントニオ古賀、トニー谷、田端義夫、藤田まこと、かしまし娘など芸能人によるショーも連日開催され「博覧会史上最大の豪華ショー」と銘打たれた。従来の博覧会が展示に比重を置いているのに対し、本博覧会はステージイベントを大きく前面に出していることに特徴がある。南日本新聞は「芸能ショーめぐり」を連載し、ショー目当てに何度も会場に足を運んだ来場者がいることも報じている。多い日には2万人が会場を訪れた。



図18. 「メキシコ文化博覧会開く」

(『南日本新聞』 昭和39年10月24日付夕刊1面掲載)

西郷南洲百年祭記念 大西郷博（1977年）

西郷隆盛の没後100年にあたる昭和52年（1977）に開催された「西郷南洲百年祭記念 大西郷博」は8月5日から10月23日までの約2か月半にわたり、鹿兒島市の与次郎ヶ浜にて開催され、公式発表で25万人が来場した。高度経済成長期に開催された「大西郷博」は地方都市の開発と発展を捉えられる。与次郎ヶ浜は昭和47年（1972）に開催された太陽国体に向け大規模に埋め立てられた開発地域であり、この地で開催された「大西郷博」は同地の土地利用促進と太陽国体で生まれたスポーツのみならず、歴史・文化についてのイメージ醸成の役割を担った。スクリーンとジオラマを用いたドラマ館では西郷隆盛の生涯が表現されたが、これは西郷隆盛を顕彰するのみならず、最先端の技術を来場者に体験する機会を提供した。また、鹿兒島県と姉妹提携するアメリカ合衆国ジョージア州をテーマにしたジョージア館も設置された。当時の米国大統領ジミー・カーターはジョージア州出身であり、日米関係の深化を象徴する。エネルギー館や電電公社館といったパビリオンの存在は、未来の産業や技術、そしてインフラへの展望も提示しようとしていたことを示している。このように、「大西郷博」は歴史と現代、そして未来を繋ぐことが試みられたと考えられる。

南日本博（1977年）

「大西郷博」と同年に開催された「南日本博」は昭和52年（1977）7月2日から11月27日まで、鹿兒島市の新祇園之洲にて開催された。「南日本博」は、その期間を二分し、それぞれ異なるテーマで構成されていた。開会から8月28日までの第1部「鹿兒島サマーフェスティバル」は、夏休み期間の家族連れを強く意識した娯楽性の高い内容であり、「ナゾの海底探検館」や「野生の王国」、「世界のスリラー館」などのアトラクションが設置された。9月15日から閉会までの第2部「西郷どん博」では「大西郷博」と同様に没後100年の西郷隆盛が顕彰され、「西郷隆盛百年館」ではその生涯や明治維新についての教育的・歴史的な側面が重視された。「南日本博」の40万人という入場者数は、同じ年に開催された「大西郷博」の約25万人という記録を上回る。会場となった新祇園之洲もまた戦後の地方都市における大規模開発地であり、この地において娯乐的、文化的イベントが開催されたことは、もはや「戦後」は遠く、経済的・文化的な成熟期にあると捉えられる。



図19. (上)「オープンした南日本博」
 (『南日本新聞』 昭和52年7月2日付夕刊1面掲載)
 (下)「西郷南洲没後百年 24日に記念式典」
 (『南日本新聞』 昭和52年9月18日付朝刊4面掲載)

コラム

EXPO'70と鹿児島

2025年は、大阪・関西万博の年。これを聞くと1970年の日本万国博覧会（以後、EXPO'70）を想起する人も多いだろう。EXPO'70はアジア初の万博として開催され、「人類の進歩と調和」をテーマに77か国と4つの国際機関が参加した。来場者数は約6421万人で当時の万博史上最多を記録。象徴的な太陽の塔を中心に未来社会を反映したパビリオンが建設され、話題を呼んだ。

そんなEXPO'70と鹿児島との関係を見てみよう。当時の『南日本新聞』には、開会初日を訪れた鹿児島の人々の様子が報じられており、特に照国高等学校（現鹿児島城西高等学校）から修学旅行の第一陣として訪れた生徒たちがアメリカ館で「月の石」を見学したことや、カナダの警察官からサインをもらって喜ぶ様子が記されている。

また会場内の「地方自治館」は、日本全国の都道府県が地域の魅力を紹介する合同館であり、鹿児島県からは薩摩焼や大島紬などが出展されていた。また「地方自治館」では「都道府県の日」が設定され、数日ごとに各都道府県の伝統芸能がいこいの広場で披露された。「鹿児島県の日」は6月28日から30日までの3日間であったが、その中日に当たる29日は、日本の「ナショナル・デー」と重なっていた。そのため当時の皇太子ご夫妻が、出水市の伝統芸能「腰矢」や加治木町（現始良市）の「太鼓踊り」をご覧になるという機会に恵まれた。皇太子ご夫妻が訪れるとあって、会場には3000人を超える人々が集まり、鹿児島の伝統芸能を堪能した。この日、鹿児島の魅力がEXPO'70を通じて世界に発信された。

さらに閉会後もEXPO'70と鹿児島とのつながりは続く。チェコスロバキア館に出展されていた、レネル・ビチェック制作の巨大なガラス造形作品「ガラスの雲」が、霧島国際ホテルに移管されることになったのである。この作品は、泉からいのちが湧き上がって雲になっていく様子を表現したものであり、その幻想的な姿はチェコのガラス工芸の高度な技術力と芸術性を示した。「ガラスの雲」が霧島国際ホテルに移管された経緯としては、当時チェコスロバキア製の織機を使っていた大和紡績株式会社が「ガラスの雲」を譲り受け、翌1971年に開業する系列の霧島国際ホテルに展示することになった、というものである。当時の霧島国際ホテルの支配人が、「チェコスロバキアの万博出品のガラスの雲を配して当時は南九州随一の設備を施し」と回想するほど、ホテルにとって「ガラスの雲」は象徴であった。ただ近年になって「ガラスの雲」はチェコ共和国に返還されたため、残念ながら、直接見ることができなくなってしまった。

この話にはまだ続きがある。大阪・関西万博のマスコットキャラクター「ミヤクミヤク」には、チェコ生まれのガラス製の生き物「レネ」という友達がいるが、その名は「ガラスの雲」を制作したレネル・ビチェックに由来する。「ガラスの雲」はもう鹿児島にはないが、EXPO'70から大阪・関西万博という昭和・平成・令和という歴史の流れのなかに、鹿児島という存在が分かち難く存在することを思わずにはいられない。（中嶋）

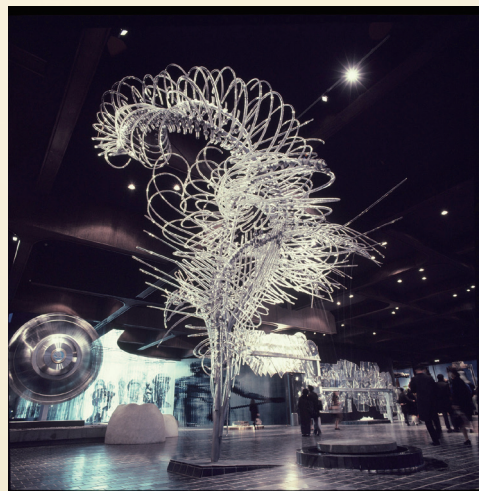


図21. 「ガラスの雲」(『EXPO'70写真集日本万国博』朝日新聞社、1970年)

(提供 朝日新聞社)

V 鴨池公園



「鴨池」と聞いて、何が思い浮かぶか。鹿児島大学郡元キャンパスの隣の地区の住所や陸上競技場などのスポーツ施設を連想する人もいれば、令和6年（2024）8月で閉店した郡元電停前の大型商業施設（旧イオン鹿児島鴨池店、鹿児島市鴨池）やその前にあった動物公園を懐かしく思う人もいるだろう。それでは、何故、「鴨池」という場所はこれらと結びつくのか。一見すると関係の無いこれらの施設であるが、「鴨池」と呼ばれる場所の過去を辿ることで全てが繋がっていくのである。

手掛かりは、趣のある石柵で囲まれた鴨池児童公園（鹿児島市鴨池二丁目）にある。園内の「鴨池」と刻まれた石碑を読むと、近世はこの辺りに黒木島津家の下屋敷（別邸）があり、その庭の池が動物園の頃まで残っていたことと、明治期に屋敷が旧藩主の島津忠義の所有となった際、新たに池を掘り鴨猟を行ったことが地名の由来とされる（図22）。つまり、「鴨池」の始まりは、屋敷の庭にあった鴨が飛来した池となる。



図22. 「鴨池」の碑（鴨池児童公園内） ※小林善仁撮影

現地の石碑を読むことで、地名の由来と近世の状態、島津家との所縁、西南戦争の時の状況（別働第一旅団長本営）、さらには動物園の存在までは分かるのだが、池と動物園を繋ぐ存在に関する記述が足りない。それこそが、路面電車を鹿児島で初めて開業し、遊園地・動物園など様々な施設を経営して現在の鴨池の基礎を築いた企業、すなわち「鹿児島電気軌道株式会社」である。

鹿児島電気軌道は、鹿児島や谷山などの財界人が共同出資して設立した民間企業で、大正元年（1912）12月の武之橋（鹿児島市）・谷山（当時、谷山村）間での軌道（市街電車）の開業を手始めに路線を伸ばしていった。当時は電車が珍しく、現在のように通勤や通学、娯楽や買い物といった日常の利用は多くなかった。そのため、全国の鉄道会社が旅客需要の創出に力を入れて様々に取り組んだ。「^{みのおありま}箕面有馬電気軌道」（「阪急電鉄」の前身の一つ）による沿線開発（箕面動物園や宝塚新温泉など）はその先駆けとして知られる。

鹿児島電気軌道も、軌道沿線の二軒茶屋（当時、鹿児島郡中郡宇村）の海辺で遊園地と動物園などを開発したが、敷地が狭く拡大も難しいことから同じ沿線の鴨池一帯（同じく中郡宇村）に着目し、島津家から土地を借用して遊園地と動物園を再整備し、大正5年（1916）9月に「鴨池遊園地」として開園した。最初の園地は軌道の山手側のみであったが、数年後には海岸まで拡張され、劇場や電気乗馬館、ボート池なども整備された。旧谷山街道に面する老舗菓子舗の「とら屋」の店名は、店の前にあった猛獣舎に因むとされ、当時の園地の広さを窺い知ることができる。

遊園地の隣には先行して競馬場があり、競馬の開催時以外は「鴨池グラウンド」として各種の競技に使用され、「オリンピック」を称する競技会も開かれた。また、競馬場の鶴ヶ崎への移転後には陸上競技場と野球場が整備され、後者は現在も鴨池市民球場（正式には「鴨池公園野球場」）として存続している。

これらの諸施設が面する浜辺も「鴨池海岸」と呼ばれ、夏場には地元の新聞社が海水浴場を経営すると共に、納涼の夏祭りや花火大会を開催した。このように、大正期に「鴨池」は、池の名前から遊園地などのある界隈の名前へと変わり、多くの人々で賑わう鹿児島市街地の郊外の実地へと変貌した。



図23. 鹿児島電気軌道が奉納した手水鉢（鴨池稲荷神社境内） ※小林善仁撮影

鹿児島電気軌道は、軌道延伸や遊園地の改造に加え、船舶事業や工場経営と経営を多角化したものの、不況の影響で経営が行き詰まり、市民の足となっていたその公共性を重視した鹿児島市によって昭和3年（1928）に買収された。こうして、路面電車は市営となり、遊園地と動物園は「鴨池公園」となったが、この時点でも住所は隣村の「中郡宇村」のままであり、名実ともに鹿児島市になるのは昭和9年（1934）8月の合併後のことである。なお、鹿児島電気軌道の名は、鴨池稲荷神社境内の手水鉢に僅かに遺る（図23）。

鴨池の地が博覧会の会場となったのは、大規模なものでも5回を数える。そのうちの昭和6年（1931）の「鹿児島国産振興博覧会」は、その当時、各地で開催された振興博覧会の一つである。「鹿児島県鳥瞰図」は、全国の鳥瞰図を手掛けた吉田初三郎によるもので、鹿児島県と鹿児島国産振興博覧会協賛会の双方から発行された。その中に、路面電車の路線と「鴨池」の電停、それに「鴨池公園」「鴨池海水浴場」と並んで「国産振興博覧会場」と記されている（図24）。

遊園地と動物園、時には博覧会の会場として老若男女を集め、多くの人で賑わった鴨池公園であるが、開園から40年ほどが経過した昭和30年代には、かつて郊外の長閑な場所であった公園の周囲にも、経済成長と人口増加を背景として市街地化の波が押し寄せていた。動物の飼育環境の改善と公園（遊園地・動物園）の規模拡大の点から郊外移転が決まり、昭和47年（1972）10月に鹿児島市郡元町から南へ約12km離れた郊外の同市平川町へと移転した。

鴨池動物園跡地は民間に売却され、昭和50年（1975）7月に大型商業施設の「ダイエー鹿児島店」が開業した。鴨池の地は、再び多くの人を集め、賑わう場所へと姿を変えた。

それからおよそ半世紀が経ち、施設・設備の老朽化などから前述の「イオン鹿児島鴨池店」（平成27年9月に店名変更）も閉店し、令和7年11月現在は、再開発に向けた建物解体の最中である。店の前に建ち、動物園（遊園地）の存在を伝え続けたオブジェは、今も跡地の一面に残る。大正初期から鹿児島の「お出かけ先」として、行楽客や買い物客、地域住民や学生などを集めてきた鴨池の地が、これから先も賑わう場所として生まれ変わることが期待される。（小林）

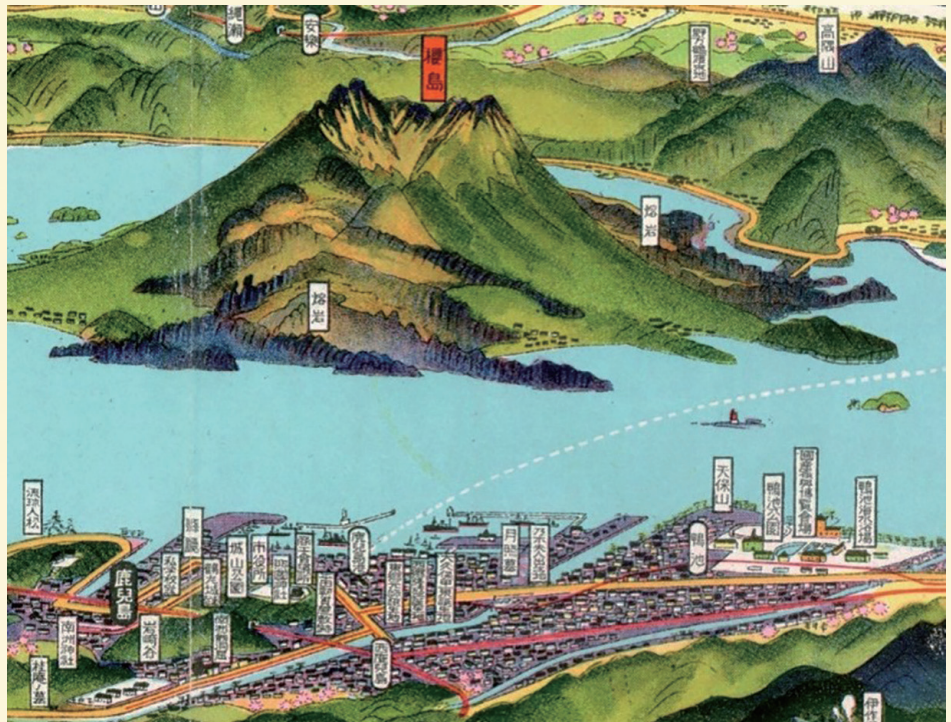


図24. 国産振興博覧会を描いた「鹿児島県鳥瞰図」（部分、昭和6年、鹿児島国産振興博覧会協賛会発行）

「鹿児島県の博覧会」 関連年表

開催年	事項（〔 〕は会期）	備考
1851年（嘉永4）	第1回ロンドン万国博覧会〔5月1日～10月15日〕	
1862年（文久2）	第2回ロンドン万国博覧会〔5月1日～11月15日〕	
1867年（慶応3）	第2回パリ万国博覧会〔4月1日～11月3日〕	日本初の万国博参加。
明治元年（1868）	《明治維新》	
明治4年（1871）	京都博覧会〔(旧暦)10月10日～11月11日〕	(京都)西本願寺
明治5年（1872）	文部省博覧会〔(旧暦)3月10日～4月29日〕	(東京)湯島聖堂
	第1回京都博覧会〔(旧暦)3月10日～5月30日〕	(京都)西本願寺・建仁寺・知恩院
1873年（明治6）	ウィーン万国博覧会〔5月1日～11月2日〕	
1876年（明治9）	フィラデルフィア万国博覧会〔5月10日～11月10日〕	
1878年（明治11）	第3回パリ万国博覧会〔5月20日～11月10日〕	
明治10年（1877）	第1回内国勸業博覧会〔8月21日～11月30日〕	(東京)上野公園
明治14年（1881）	第2回内国勸業博覧会〔3月1日～6月30日〕	(東京)上野公園
明治15年（1882）	第1回九州沖縄連合共進会（長崎市）〔10月1日～10月30日〕	(長崎)
	第1回内国絵画共進会〔10月1日～11月20日〕	(東京)上野公園
明治16年（1883）	第1回内国水産博覧会〔3月1日～6月8日〕	(東京)上野公園
	第2回九州沖縄八県連合共進会〔10月20日～11月28日〕	興業館
明治17年（1884）	第2回内国絵画共進会〔4月11日～5月30日〕	(東京)上野公園
明治23年（1890）	第3回内国勸業博覧会〔4月1日～7月31日〕	(東京)上野公園
明治28年（1895）	第4回内国勸業博覧会〔4月1日～7月31日〕	(京都)岡崎公園
明治32年（1899）	第10回九州沖縄八県連合共進会〔2月10日～3月21日〕	県庁構内・物産陳列場（旧興業館）
明治36年（1903）	第5回内国勸業博覧会〔3月1日～7月31日〕	(大阪)今宮（後の天王寺公園）
明治37年～38年 (1904～1905)	《日露戦争》	
明治40年（1907）	東京勸業博覧会〔3月20日～7月31日〕	(東京)上野公園
大正3年（1914）	東京大正博覧会〔3月20日～7月31日〕	(東京)上野公園
大正5年（1916）	鹿児島電気軌道が鴨池遊園地を開業	
昭和3年（1928）	鴨池遊園地を鹿児島市が買収	
昭和6年（1931）	国産振興博覧会〔4月1日～5月15日〕	鴨池公園
昭和15年（1940）	肇国興亜博覧会〔10月7日～12月1日〕	鴨池公園
昭和16年～20年 (1941～1945)	《アジア・太平洋戦争》	
昭和25年（1950）	九州ステートフェア〔3月25日～5月15日〕	鴨池公園・農事試験場周辺
昭和31年（1956）	誰にもわかる科学博覧会〔10月10日～11月30日〕	鴨池公園
昭和39年（1964）	メキシコ文化博覧会〔10月24日～11月23日〕	鴨池公園
昭和45年（1970）	日本万国博覧会（大阪万博）〔3月15日～9月13日〕	(大阪)千里丘陵
昭和49年（1974）	かごしま太陽博覧会〔3月24日～5月26日、中止〕	鴨池公園
昭和52年（1977）	南日本博〔7月2日～11月27日〕	新祇園之洲
	大西郷博〔8月5日～10月23日〕	与次郎ヶ浜
平成元年（1989）	サザンピア21〔3月16日～5月14日〕	谷山臨海部

参考文献

- 『鹿児島県物産陳列場要覧』（鹿児島県物産陳列場、1914年）
『国産振興博覧会誌』（鹿児島商工会議所、1933年）
『紀元二千六百年 肇国興亜博覧会誌』（鹿児島朝日新聞社、1942年）
『鹿児島県史』第四卷（鹿児島県、1943年）
『明治前期産業発達史資料』（明治文献資料刊行会、1976年）
『思い出の鴨池動物園』（黙遙社、1986年）
吉見俊哉『博覧会の政治学』（中公新書、1992年）
『別冊太陽 日本の博覧会』（平凡社、2005年）
國雄行『博覧会の時代－明治政府の博覧会政策－』（岩田書院、2005年）
三宅拓也『近代日本〈陳列所〉研究』（思文閣出版、2015年）
佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』（思文閣出版、2015年）
寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』（思文閣出版、2017年）
山路勝彦『地方都市の覚醒 大正昭和戦前史 博覧会編』（関西学院大学出版会、2017年）
『魔海魚譜－東京国立博物館所蔵銅版手彩色本・描かれた鹿児島の海洋生物－』（坊津歴史資料センター輝津館、2018年）
ペーター・パンツァー / 沓澤宣賢 / 宮田奈奈編『1873年ウィーン万国博覧会一日唄からみた明治日本の姿－』（思文閣出版、2022年）
デジタル南日本新聞データベース（南日本新聞社）

鹿児島の博覧会の主要会場



図25. 『実測番地入鹿児島市街地図』（土橋南江編、1930年刊）による。

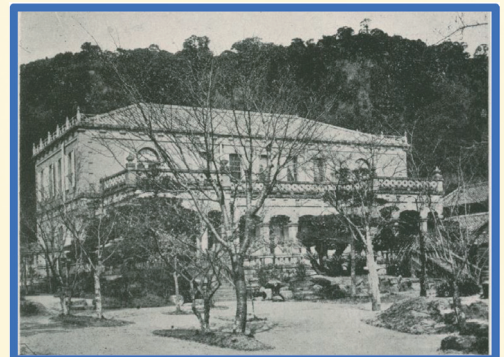
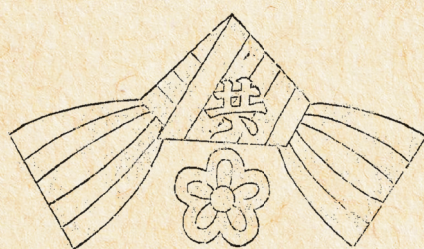


図26. 興業館 『鹿児島県史』第四巻



図27. 絵葉書「鹿児島名所 鴨池遊園地」



令和7年度 鹿児島大学附属図書館・鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター合同貴重書公開

Exhibitions in Kagoshima 鹿児島の博覧会

編者・執筆者 丹羽謙治（鹿児島大学法文教育学域法文学系 教授）
小林善仁（鹿児島大学法文教育学域法文学系 准教授）
伴野文亮（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任准教授）

執筆者 佐藤宏之（鹿児島大学法文教育学域教育学系 教授）
日高優介（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任助教）
鈴木優作（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任助教）
中嶋晋平（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任助教）

発行 鹿児島大学附属図書館
<https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/>
〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-35 ☎099-285-7460

発行日 令和7年11月21日

印刷 斯文堂株式会社

（裏表紙の図）第10回九州沖縄八県連合共進会 審査長の徽章（『同 事務報告』明治32年による）